



TITLE:

応答・ディスカッション

AUTHOR(S):

CITATION:

応答・ディスカッション. CIRAS discussion paper No.95: 装いと規範 3
-- 「伝統」と「ナショナル」を問い直す 2020, 95: 46-48

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_95_46

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

応答・ディスカッション

●討論参加者

劉 玲芳(大阪大学)／貴志 俊彦(京都大学)／小形 道正(京都服飾文化研究財団)／杉本 星子(京都文教大学)

●司会

後藤 絵美(東京大学)

後藤絵美(司会) それでは、各ご報告者の方に、コメントの内容について考えたことをお話しいただければと思います。

■中国服装史のなかに学生装を位置付けて 中山装の由来を明らかにしたい

劉玲芳 ご指摘とコメントをいただき、ありがとうございます。補足したいと思います。まずは「日本・中国・シンガポールを中心に」というサブタイトルをつけましたが、これは比較研究ではありません。どちらかと言うと、中国側の視点から、なぜ日本の学生服を受け入れて、またどうやって華僑が集まっている社会、集団に伝わっていったのか、その変遷過程やルートを明らかにしたかったのです。

今回の報告では曖昧だったかもしれませんが、最終的な目的としては、研究背景のなかで申し上げたように、これまで中国の側から見た男性の服装史のなかで見逃されていた学生装、学生服の歴史を明らかにすること、つまりこの空白の部分を補足するのが私の研究の本来の目的です。もう一つ、今回の報告では時間の都合であまり話ができませんでしたが、学生装とかなり密接な関係があるとされる中山装について調べたいということがあります。中山服の由来についてはさまざまな説がありますが、そのなかで学生服由来とする説と、東南アジアの何らかの服装を由来とする説と、二つのルートがあります。いったいどちらが正しいのか、何が変わったのかを検証したいと考えています。今回なぜシンガポールの事例を取り入れたのかと言いますと、東南アジアはいったいどのような服装だったのかを検証してみた

いと考えたからです。実際は、1900～1920年代の間、少なくともシンガポール、マレーシアで、学生服が学校の制服として着用されていたことがわかりました。

先ほど貴志先生がおっしゃったように、中国は広いので、官と民とをきちんと分けないと全体的に何が言えるのが難しくなることは間違いありません。現段階では、地域ごとに学校の種類もリストにまとめていますが、まだ分析は進んでいないので、今回は取り上げられませんでした。しかし本来は、地域ごとに分析し、また官と民とを分けて論じなければならぬと思います。これは今後の課題とします。

最後に、先ほども少しお話ししましたが、学生装は中山装との関係性がたいへん大きいと思われます。学生装は一部の学校の学生に着用されていた制服と思われていますが、1920年代ごろの中国では、一般の男性が愛用する服装として、よく新聞記事に出ております。つまり学校の制服としてだけではなくて、学生装は一般の男性の服装としても着られていたことがわかりました。そこからさらに中山装に変わったとする説があるので、中国側の学生装は、日本の学校の制服とは異なる点があると思います。

貴志俊彦 もっと研究してほしいなと思う点は、服をどうやって作って、それがどう流通しているかということです。ただ「こういう衣装がありました」ということだけではなくて、誰がデザインして、原材料はどこから取ってきて、製品としてどう作ったかという部分がわかると、もう少し話もいろいろな展開があると思います。そこで華僑資本も重要な意味をもったということになってくるかと思います。

私が中国だけでやったらいいというのは、現在に

至るまでの中山装を含めて、一つの象徴性があるからです。まさに学生装については、1990年代以降の中国はみんな体操服、ジャージなんですね。そういう点で、中国人にとって学生服がどのような意味合いを持っていて、どんな意識で着用されているのかということがわかってくると思います。そういった点では、1920年代で話を止めるのではなくて、学生装にしてもそうですが、どのように作って、どのように流通させて、その製品が中国国内だけではなく海外にも輸出されていて、という話にすると、もっとグローバルな視点が活かされていくのではないかと思います。

後藤 貴志先生のコメントは、装いに関心を抱く私たち皆に響くものだと思います。続いて小形さん、お願いします。

■ 現代日本における衣服の問題が 顕著に見えるのが着物

小形道正 貴志先生が言われたように、作る時代というのは同時に作り替える時代だったということをも、もう少し強調する必要があると思いました。鶴見俊輔さんも同じことを言っているわけですし、やはりそうだなとあらためて思いました。

また、デザインについて記述することは、たしかに必要だと感じています。1970年代半ばぐらいに「辻が花ブーム」がおこったりしているので、もう少し着物の模様の付け方、その具体的な変化みたいなものまで言えると厚みがある記述になっていくのかなと思います。

そのとき、その変化をどのようにして明らかにしていくのかということが、大きな問題になってくると思います。そこはもしかすると社会学ではなくなるというか、より学芸員っぽく、対象との距離を縮めた記述をしなければならないかなと感じています。このことは記述の仕方、変化の基準の確定もふまえて、今後の課題にしたいと思います。

森先生が言われたことに関しては、まずはコスプレというのは、外国人が日本的なものを見る、あるいは日本人が外国的なものを見るという感じがある。だからコスプレというものがあると思いますが、日本人が日本人ではないというか、日本人だからといって着物のことあるいは日本のことを、外国人と同じようにほとんど知らないのではないかと、どこかで思うことがあります。たとえば、先ほど申し上げ

たように、着物の季節感とかもまったく関係ない状態になっている。着物ですと基本的に季節があって、帯はこう揃えるということがありますが、そういうことをあまり感じないということがあります。こうした状況は、着物にだけというより、着物により顕著に現在の衣服の問題、現代社会の問題があらわれているのではないかなと私は思っています。

■ 着物をめぐるナショナルな視点 ——今後の研究課題

小形 ナショナルな問題、民族主義的な問題については、帯谷先生が言われた「伝統」というところと結びつく部分もあると思います。基本的に、和服という言葉自体が近代的な言葉であると思います。みていると、「着物は日本人の〇〇だから」といった言説はかなり昔からあって、これも戦前からみうけられます。一方で、1960年代を過ぎた頃から、和服〇〇協会といったさまざまな団体が誕生したこともたしかだと思います。まだきちんと調べていないので、明確なことは言えませんが、これは政治とも関連していて、議員方の和装振興議員連盟といった団体もあったと思います。今回の私の発表ですと、ナショナルな視点みたいなものは抜けているとは思いますが、それはけっこう言われていることでもあるので、あまり意識していないところもあるのかなと思います。

着物について海外で展覧会をやっても、外国人が着物を着ると文化的盗用として「そういうことはよくない」みたいなかたちで中止運動が起こるということもあります。でも、そこは私のなかでは、同じような企画が行われていても、炎上したりしない場合があるので、むしろその基準や炎上の過程に興味がありますね。また逆に、日本人の日本らしさとは一体どこにあるのかということについて疑問に思います。そのあたりから、あまり関心がないと言えば関心がないのかもしれないし、意識していないと言えば意識していないのかなと思います。そこはもう少し、今後進めていくうちに問題意識が出てくるかもしれません。

■ 着物のリサイクルをめぐる現状と 「手仕事」と「記憶」

小形 リサイクルの産業にどのぐらいの規模があるのかについては調べられてないので、きちんとしたことは言えませんが、とくに銘仙などを着るのは多いというか、ブームになったりしていました。しかし

結局、銘仙を着るとか集めるみたいなものも、大正ロマンのコスプレみたいな感じで取り上げられていたように思います。

こうしたものも含めて、現在は手仕事への関心というのが、かなり話題を占めているように思います。ファッションでたとえば展覧会の企画を考えると、よくやりがちな企画としては、手仕事を含むマテリアルへの注目や、そこに「記憶」といった要素を付与したりというのが——あまりいい言い方になっていないかもしれませんが、それが大変多い。ブランドなども、手仕事とか人の記憶の問題みたいなものを押してくることがありますが、それを言うということは、それほどいまの社会から失われており、それほどまでに遠いからこそ謳わないといけないのかなと私は感じてしまいます。だから、そうした現状自体を含めて一度考えてみるのがおもしろいのではないかと思います。

■「制服」と「コスプレ」が

今後の衣服を考える際のキーワードに

杉本星子 森先生が言われた日本の認証制度との比較に関連して、Kanchipuramなどはある意味で行き詰まりもあります。ちょっと気になっているのがBanarasiです。中国のものが入ってほとんど崩壊しているところで、認証制度に意味があったのかどうか、このあたりはもう少しきちんと検証したいと思います。それから貴志先生がおっしゃった裁判についても、お墨付きを与えるということは利害関係を生むし、生産や販売の現場では非常に重要ですから、おそらく裁判などもあると思いますので、そのあたりも調べてみたいと思います。

今日お二人の話を聞かせていただいて、制服はとてもおもしろいテーマだと思いました。大学のすぐそばに小学校があります。少子化で三つの小学校と中学校一つが統合されて小中一貫校ができたところに制服になりました。それまで京都の公立小学校は制服はなかったのです。だから小学生が制服を買わなければいけなくなって、貧しい子もいるのでなかなかたいへんです。でも可愛い制服なので、子どもたちはすごく喜んでます。制服というのは何だろうということは、興味深いテーマです。とくに現在コスプレでも制服を着ますから小形さんのテーマとも絡んできますし、すごく興味深いと思っています。

小形さんのお話もおもしろくて、最後に洋服レン

タルの話がありましたが、結局は衣服を着るという行為そのものがコスプレになっているのではないかとという大きな問題提起だと思います。先ほど帯谷さんがおっしゃったように、21世紀の服を考えるときのキーワードなんだろうと思います。

この前、西陣の職人さんと話をしていたら、古着がじつはすごくたくさん出てきているそうです。そして出てくる古着というのは、シルクの質が違うんですね。現在の新しい、品種改良したいいシルクだと硬くて重たいシルクですが、古着でたくさん出てきたのは、大正時代などに普通に着ていたものなので、細くて柔らかいシルクで、着直すのにも耐え得るシルクだけれども、その量は限られているので、もう少ししたら枯渇するだろうということでした。そうして古着すらなくなったときにどうなるのかというあたりも、ぜひ今後調べていただけたら、おもしろいかなと思います。いろいろありがとうございました。

フロアから 私はまったくの門外漢で、専門は哲学です。服というものは実際にあるもので、目の前にあって、歴史性があって、着られたり、着られなくなったりというのがあんなで出てきているものだなということを、具体的な事例でみなさん探求されておられて、すごく勉強になりました。たとえば認証制度の話でも、作り方が変わると質が変わるということで、ある種、お墨付きを与えようとしても、かつてと同じものではないわけですね。先ほどの西陣の話もそうですが、そういったなかで新しく作られていく伝統というものはどういったものだろうかとか、先ほど貴志先生がおっしゃった四つの視点から総合的に現在の服飾文化を見ていく必要があるのも、たいへん勉強になりました。ありがとうございました。

後藤 ナショナリズムや伝統というのは、ある程度研究がされてきて語り尽くされてきた感があるかと思っていましたが、帯谷さんが趣旨説明でおっしゃったように、21世紀のいまこそまた新たに組みめる課題なのかもしれないと、皆さんのお話をうかがっていて思いました。今日はありがとうございました。